The 6th WORLD GAMES 8/16(Thu)~26(Sun)

式典・セレモニー

II

開会式

1. 概　　要

開会式は、2001年8月16日(木)、午後3時～5時(開場は正午)、秋田市八橋陸上競技場を会場に行われた。

入場券は、当日販売分も含めて完売し、招待者も含め11,507人の観客と、およそ1,600人の選手・役員で満員となった。

好天にも恵まれて式典はほぼ予定通り進み、観客、選手・役員、出演者が一体となって大いに盛り上がり、関係者の予想もしくは期待以上の好評を博した。

開会式の模様は、ＮＨＫ教育テレビで全国に生中継され、秋田県内では18パーセントを超える視聴率を記録した。また、ＦＭラジオでは全国中継、AMラジオでは県内中継され、多くの人が楽しんだ。

2. 準　　備

(1) 制作体制の確立

2000年4月、組織委員会事務局の拡充に伴い、開会式の本格的な制作作業に着手した。最初の課題は、制作を進めるための体制づくりであった。

「秋田の力を結集し、やり遂げることで大きな自信につなげたい」という大会全体の方針を踏まえながら、一方で、地元ではまったく経験・実績の無い中で、「国際大会にふさわしく、秋田を発信するに足る、質の高い開会式」を限られた予算と時間で実現することができる体制とは何か、検討・協議を重ねた。

この過程で、秋田市出身で、長野オリンピックの開・閉会式を手がけた今野勉さんと出会った。

これがキーポイントとなり、今野さんを開会式総合プロデューサーに迎え、地元で作る開会式制作チーム(秋田県を代表する、ソフト系の企画会社、ハード系の企画会社、芸能集団の三者で結成した共同企業体）が実務にあたる体制で、制作を進めることとした。

また、今野さんの助言で、組織委員会事務局も、開会式の運営のみを担当するのではなく、開会式プログラム等内容の制作にも積極的に関わっていく体制とした。

(2) 開会式コンセプト

2000年8月からは、今野さん主宰のプロデューサー会議を中心に具体的な中身の検討に入ったが、まず、次のような開会式コンセプトを掲げた。

「伝統・躍動・感動」～大会コンセプト
“感動の新しいかたち”を踏まえて

伝統（Tradition）
「ようこそ秋田へ」のもてなしの気持ちを秋田の伝統芸能をもって表現し、観客・選手ともに楽しめる歓迎の開会式とする

躍動（Action）
伝統芸能をダイナミックに再編成し、子供達の参加を含めて、未来への躍動を感じさせる開会式とする

感動（Inspiration）
選手、観客、出演者が、一体となって参加する部分を作り、感動を共有する開会式とする

(3) 制作のポイント

制作にあたっては、挨拶などの、欠かせないけれども退屈な時間になりがちな、いわゆる“式典的要素”と、“アトラクション的要素”を融合させ、全体としての統一感を出すことに腐心した。

このため、入場前から大道芸などで雰囲気を盛り上げたり、会場装飾に高さ6メートルにもなる華やかな梵天（横手市）を使うなどの仕掛けをするとともに、冒頭に合唱団と吹奏楽による壮大な式典賛歌を持ってくる、選手が着席のために移動する際にも布と大会テーマソング演奏によって演出する、などとプログラムにも工夫することとした。

また、祭り・伝統芸能をメーンに据え、この種のイベントにありがちなマスゲーム中心の構成は採らないこととした。

これは、そもそも大規模なマスゲームを作るだけの時間的・経費的余裕が無かったこともあるが、長い年月を経ている祭り等には本物が持つ、人を魅了する力があり、秋田はそうした素材が豊富であ

るとの認識があったためである。また、ワールドゲームズが既存の施設を使い、ハード面での使い捨てを戒めているのだから、ソフト面でも開会式のためだけに使うものは最小限にした方が、大会の特色に合うとの思いもあった。

とはいえ、単に、祭り・伝統芸能の羅列にならないよう、組み合わせ、切り口を斬新なものにすることによって、地元の人も初めて観るようなものにするように配慮した。

なお、今野プロデューサーの協力も得て、ポイント毎に記者会見等を開き、開会式のPRにも努めた。

(4) 制作作業

各種の祭り・伝統芸能は、陸上競技場という本来は運動を目的とした施設で、真夏の日中に行うのは困難なものも多い。また、それぞれに意味や背景があり、物理的条件さえ整えば良いものでもない。演出上の要請を一方的に押しつけるわけにはいかず、調整は楽な業務ではなかった。

また、マスゲーム中心の構成ではないとはいえ、広大な会場で空間的広がりを持たせ、単調な構成にしないためにも、やはりマスゲームは重要な要素で、短時間で出演・練習の段取りを組むなどの調整をし、少ない回数で振り付けるのも大変であった。

これらを可能にしたのは、祭り・伝統芸能の保存団体や地元市町村、多数の子供達をまとめてくれた学校、そして施設を管理する秋田市などの積極的な協力である。また、出演者自身が、熱心にしかも楽しんで取り組んでくれたことも、必ずしも十分な段取りのできなかった事務局を救ってくれた。

3. 内　　容

(1) 開式前プログラム

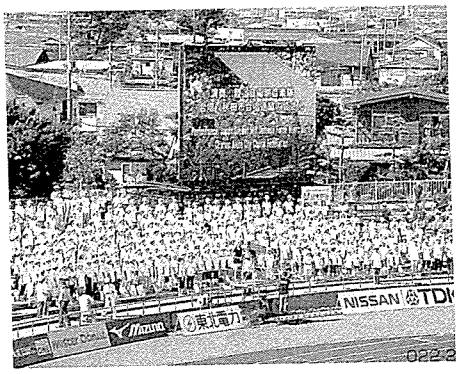
開場は、入場時の混乱を避けるため、開式3時間前の正午とした。このため、大型画面による秋田県及びワールドゲームズPRビデオ、スポンサーCMの上映などのほかに、次のような開式前プログラムを実施し、特に子供達の演技が喝采を浴びた。

・マーチングバンド演奏（太陽幼稚園、吉田小学校、秋田県警音楽隊）
・ナミーハギーダンスショー（スタジオS、浜田小学校）

また、開式前オリエンテーションとして、フィナーレ曲「ヤートセ」のかけ声の練習や、入場行進曲に含まれる「県民の歌」の合唱指導を行った。

(2) 開　幕

国際的な作曲家である石井眞木さん作曲で、今野プロデューサーが作詞を手がけた式典賛歌「まほろばの秋田」。演奏は400人の県民合唱団と70人の自衛隊音楽隊で幕開けした。



曲の途中で行われた、今大会に出場する世界のトップジャンパー30人によるパラシューティング降下が観客の度肝を抜き、ワールドゲームズ競技の質の高さや面白さをアピールするのに大いに貢献した。

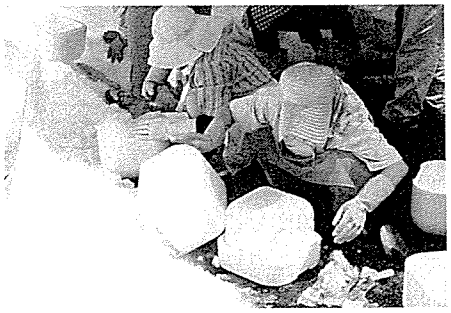
(3) 大会旗等及び選手団入場

選手団の入場は、秋田大会が、IWGAとIOCの協力関係が急速に発展する過渡期にあたったため、従来方式の競技団体毎とも、オリンピックのような国毎とも違う、オリジナルなものとなった。

まず、ボーイスカウト秋田県連盟の支持により、大会旗等が入場した。それに続き、参加国旗及び国名プラカード、参加ＩＦ旗及びＩＦ名プラカードが、それ

ぞれ一団となって入場した。選手団は、それぞれ自国の小旗を振りながら、概ねＩＦ毎だが混然とした固まりとなってそれに続いた。

この選手団は、なまはげ（男鹿市）、小町娘（雄勝町、ＪＡグループ秋田）に先導され、また、1,000人を超える子供達にエスコートされた。子供達は競技のピクトグラムの入った直径2.7メートルのバルーン22個、本物の雪でできたミニかまくらを持っており、また、雪玉を客席に投げ入れながらの行進で、歓声を浴びた。



入場行進曲は、第１部を日本を代表する作曲家の一人である田中賢さん、第２部を石井さんが手がけ、自衛隊音楽隊が演奏した。音楽が途中で終わってしまうハプニングがあったが、観客が、手拍子やウエーブを行い、選手団を温かく迎え入れてくれた。

(4) 国旗・大会旗掲揚

自衛隊音楽隊による国歌演奏にのせて国旗が、秋田県出身のエレクトーン奏者であり、大会テーマソングの作曲者でもある加曽利康之さんの生演奏による大会テーマソング（スローバージョン）にのせて大会旗等が掲揚された。掲揚は、いずれもボーイスカウトが行った。

(5) 開会宣言

遠山敦子文部科学大臣が大会の開会を宣言し、石井さん作曲によるファンファーレが自衛隊音楽隊によりきらびやかに演奏された。

(6) 挨　拶

はじめに寺田秋田県知事が歓迎の挨拶を行い、大会主催者のフローリックIWGA会長、運営主体の林AOC会長、ケバン・ゴスパーIOC副会長が挨拶を行った。

これら開会宣言と挨拶は、すべて大型画面に日英双方の訳文を同時に流した。

(7) 選手宣誓

水上スキーの選手である成田童夢・夢露さんの兄妹が行った。２人は、それぞれ15歳と13歳であるが、そろって前年の世界選手権を制したトップアスリートである。子供らしい躍動感溢れる宣誓は、アドリブの「ハッピーで行こう。でなきゃお留守番ですよ。イエーイ」のセリフとともに、大会を通じて話題となった。

(8) 大会テーマソング演奏

選手団は、アトラクションを観るためにバックスタンド側に移動した。これを、歌手の森川美穂さんが、自身が作詞した大会テーマソングを歌いながら出迎えた。また、ボーイスカウトが、選手席を覆っていた巨大な布を剥ぎ、トンネルを作って選手団を通す、などの演出を凝らした。演奏は、加曽利さんが行った。

(9) アトラクション

秋田の伝統芸能、祭りをダイナミックに再編成。4,000人以上の県民参加により、感動のパフォーマンスを行った。

○序　章

世界の人々を結ぶ大綱会わせの儀式。柿崎竹美さんが歌う「ひとつうた」にのって刈和野大綱引き（西仙北町）が、約600人の担ぎ手（地元住民・中学生、公募ボランティア）によって入場した。

忽然と大地から湧き出たように登場した大駱駝艦（舞踏集団）が、鮮やかな緑色の衣装をまとい、怪しい舞踏で出迎えた。

○第１章「大地」

綴子大太鼓（鷹巣町）の豊穣を願う響きを皮切りに、秋田県太鼓連盟約

300人による、地鳴りのような和太鼓の共演。三吉神社梵天（秋田市）と梵天歌が勇壮に盛り上げた。

○第2章「恵み」

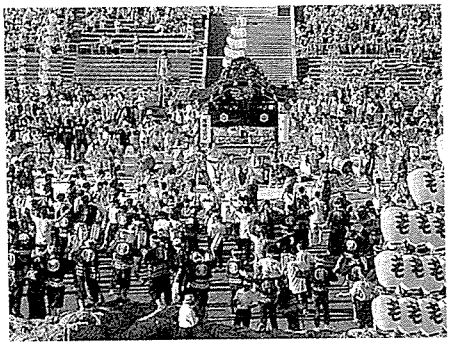
約60人によるモダンダンス、約300人の中学生による団体演技。緑の木々、澄んだ水。秋田の豊かな自然を、加曽利さん演奏のエレクトーンの調べにのせて表現した。

○第3章「躍動」・フィナーレ

飾山囃子（角館町）、花輪囃子（鹿角市）、土崎湊囃子（秋田市）。秋田の三大囃子が初めて共演。竿燈（秋田市）も登場し開会式はいよいよクライマックスを迎えた。

フィナーレは2つのバージョンのオリジナル秋田音頭「ヤートセ」そして「まほろば」。秋田県出身の歌手、岩本公水さん、柿崎竹美さん、現役の高校生、浅野江里子さん等が歌い、わらび座が演奏し、踊った。

観客、選手、出演者が一体となって盛り上がり、グラウンドは色とりどりの祭りの輪で埋め尽くされた。選手は、最後には、一人残らずグラウンドに降り祭りの輪に加わった。



4. 運　　営

実施内容が固まりつつあった2001年4月頃から、観客への対応など運営業務の準備作業が本格化した。

登録ボランティアだけでは十分な要員を確保できなかったため、行政、学校、団体からの協力を得て、まず、人集めから行わなければならなかったが、最終的には1,400人を超える数となった。

業務の割付、運営マニュアルの作成、業務研修と進めたが、経験もなく数も少ない事務局員でこなすのは大変で、連絡の不備も多々あったほか、研修の前日に徹夜して形ばかりの資料を仕上げるのがやっと、ということもあった。

結局、事務局から提示できたマニュアルや実施体制は万全なものとは言えず、また、業務によって完成度に差のあるものとなってしまった。それでも、要員の大多数は、その不備をもって事務局を責めるのではなく、自主的に補完するような意見を出す、打ち合わせを行うなどの取り組みをして、本番に備えてくれた。

こうした姿勢が、マニュアルを超えた観客等への対応の良さにつながり、開会式の評判が良かった一因となった。

当日は、30度を超える暑さとなり、満員でもあったため救護所は大忙しであった。医師8人、看護婦・保健婦12人、救急車2台、救急救命テントを9ヶ所に配置したが、51人が利用し（うち熱中症の疑い26人）、6人が救急車で搬送された。

また、秋田県警も臨時交番の設置、爆発物処理班の待機など万全の警備体制を敷き、秋田市消防本部も救急車の他に消防車も待機させるなどの安全対策を取ってくれた。このおかげもあり、警備・防災面で大きなトラブルは発生しなかった。

予想を上回る観客数となったため、急遽、関係者席の一部を一般席に割り当てるなどの対応をするなどトラブルはそれなりにあったが、開会式の進行を妨げるようなものは無く、総じて運営は、ほぼ順調であった。

公式パーティー等

1. ワールドゲームズ前夜祭

大会開催を翌日に控えた８月15日午後７時から、秋田市中通に設置したワールドゲームズプラザで、ワールドゲームズ前夜祭を開催した。

寺田秋田県知事の歓迎の挨拶、フローリックＩＷＧＡ会長、林ＡＯＣ会長の主催者挨拶に続き、日が落ちる中でワールドゲームズプラザ照明の点灯式を行うと、明るくなった会場から大きな拍手が沸き起こった。

その後、参加したＩＷＧＡ招待者や地元関係者、ボランティアなど大会関係者約1,000人は、歓談しながら翌日から繰り広げられる大会の成功を祈念した。

エレクトーン奏者の加曽利さんの大会テーマソング演奏やわらび座のアトラクション、大会マスコットのナミー・ハギーも前夜祭を盛り上げた。

2. ウェルカムパーティー

開会式終了後の8月16日午後7時から、本部ホテルである秋田キャッスルホテル４階放光の間でウェルカムパーティーを開催した。

歓迎のレーザーショーで始まり、主催者・ホストシティとして、フローリックＩＷＧＡ会長、林AOC会長、寺田秋田県知事の各挨拶、来賓のゴスパーIOC副会長、金 雲龍IWGA終身名誉会長の各祝辞に続き、津谷永光秋田県議会議長による乾杯の音頭で開宴した。

ＶＩＰやＩＷＧＡゲスト、ＡＯＣゲストなど開会式招待者約800人が出席し、盛況であった。

3. ワールドゲームズパーティー

８月19日午後７時から、秋田ビューホテル４階全フロアーで、選手間の交流を深めることなどを目的に、ワールドゲームズパーティーを開催した。

フローリックＩＷＧＡ会長、林ＡＯＣ会長の挨拶のあと、寺田秋田県知事の音頭で乾杯。各競技団体の役員や選手など約2,000人の参加者は、国・地域や競技の枠を超えて談笑した。

アメリカ空軍太平洋音楽隊―パシフィックブラス―の演奏や河辺太鼓保存会による和太鼓披露、生田流箏曲宮城会による琴の演奏などでパーティーを盛り上げた。

4. フェアウェルパーティー

閉会式の式典終了後、８月26日午後８時から、雄和町ビラ・フローラを全館借り切り、ＶＩＰ、大会関係者など、およそ150人を集めてフェアウェルパーティーを開催した。

秋田大会ダイジェストビデオを背景に歌曲の生演奏で出席者を迎え、林ＡＯＣ会長が大会の成功を祝う挨拶、フローリックＩＷＧＡ会長が関係者の尽力に感謝する挨拶を行った。続いて、次期開催地のベルベル・ティーリング、ドイツ・デュイスブルク市長が秋田を讃えると共に、第７回大会への抱負を述べた。

伊藤憲一雄和町長の音頭で、町特産のワインで乾杯した後は、歌、トーンチャイム、ピアノの生演奏などをBGMに、大成功に終わった大会を振り返りながら、歓談・食事を楽しんだ。

閉会式

1. 閉会式の概要

日　時：2001年8月26日(日)
　　午後7時～9時（開場午後6時）
会　場：秋田県立中央公園あきたスカイドーム
　　※雨天によりドーム前広場から変更
構　成：閉会式では、大会に関わった多くの人々への感謝と、次回大会へのエールの気持ちを込めて、秋田の最後の夜を盛り上げるものを目指した。閉会式の構成は、式典部分の「セレモニープログラム」と、参加者が一体となって盛り上がる内容を盛り込んだ「パーティープログラム」の2部構成とした。

参加者

入場者	招待者	1,459人
	選手・役員	1,000人
	ボランティア	600人
運営要員	支援職員	48人
	語学ボランティア	10人
	雇用スタッフ	12人
	委託業者等	41人
出演者	IF旗保持者	26人
	国旗掲揚者	6人
	アトラクション	118人
合　計		3,320人

2. 出演者について

閉会式の出演者は、言葉が通じなくても楽しめるようなダンスや音楽を中心に、参加者全員が交流しやすい雰囲気を作ることを前提に選定された。また、大会の集大成という意味から、準備期間から大会本番まで、様々な形でワールドゲームズ大会を盛り上げてくれた方々に出演を依頼した。

公式テーマソングの作曲者である加曽利さんについては、オープニングアタックから選手団の入場に至るまでのエレクトーン演奏と、パーティープログラム中でのライブ演奏で音楽的な盛り上がりを演出してくれるよう依頼した。

秋田市内のダンススタジオ・スタジオSについては、事前PRの段階から実施してきた「ナミー＆ハギーダンス」をストーリー仕立てにしたダンスパフォーマンスで、大会のフィナーレを華やかに盛り上げてくれるよう依頼した。

大道芸パフォーマンスについては、大会期間中、ワールドゲームズプラザやウェルカムセンターでの文化交流プログラムに出演したパフォーマーに出演を依頼した。

3. 運営体制

運営スタッフは、支援職員48人、語学ボランティア10人、雇用スタッフ12人、委託業者等41人の総勢111人。運営体制は、支援職員を中心とする運営本部と、委託業者のスタッフを中心とする演出本部の2部体制とした。

運営本部は更に、総務班・VIP接遇班・広報班・受付班・観客整理班・式典班の6班からなる会場運営部と、車両誘導班・駐車場班・選手輸送班・選手誘導班の4班からなる警備輸送部によって構成された。

本番では、雨天による会場の変更で、一部、レーザーによる演出効果等が実施できなかったものの、プログラムの進行はタイムスケジュールどおりに行われ、演出本部と会場運営部・式典班との連携もスムーズに行われた。

運営本部については、支援職員に対して3～5回の事前研修を実施して本番に備え、2回の現地研修のうち、1回は雇用警備スタッフと合同で研修を行い、会場利用についての事前確認を行ったが、雨天のため会場利用計画が変更した上、雨の中での業務となったため、特に選手の輸送・誘導の際に混乱が見られた。雨天時の計画確認が十分でなかったことが、反省点としてあげられる。

4. 進行及び内容

(1) 開場・プロローグ

閉会式当日は夕方から集中的に降雨があるとの天気予報であったため、午後2

時30分、会場を「あきたスカイドーム前広場」からスカイドーム内に変更することを正式決定した。スカイドーム内では、男子綱引き（インドア）が行われており、当日は、綱引き会場からの転換をスムーズに行うことが運営面での課題となった。

午後６時。受付設置よりも観客の出足が早く、多少の混乱を生じたが、予定通りに開場。午後６時30分からは、プロローグとして11日間の各競技のダイジェスト映像を上映。世界最高レベルの競技の数々、入賞者の表彰台上でのパフォーマンス等、印象深いシーンが散りばめられたビデオを見ながら、選手団を迎え入れる観客・ボランティアの期待感が高まった。

(2) 開式・セレモニープログラム・IF旗及び選手団入場

午後７時。加曽利さんのエレクトーン演奏により閉会式の開式が告げられ、続いて、高さ４メートルに達するローカロリー花火が一斉に噴き上がり、観客の高揚感を高めた。演奏がテーマソングに変わり、ＩＦ旗を持った26人の雄和町内の中学生が選手団を先導して入場。国・地域の区別なく、バラバラに入場してきた選手たちは、民俗衣装を着たり、メダリストはメダルを身につけて入場するなど、それぞれに閉会式を楽しんでいた。中でも、即席のダンスパフォーマンスは、会場を大いに盛り上げた。
スカイドーム内には綱引き競技観覧用の仮設観客スタンドが組まれており、会場が屋内に変わったことで、参加者全員が同じフィールドで感動を分かち合うという当初のねらいは薄れたが、フィールドにいる選手団が観客席へウェーブを促すなど、事前には予想しなかった選手と観客の一体感が生まれた。

(3) IWGA旗引き継ぎ

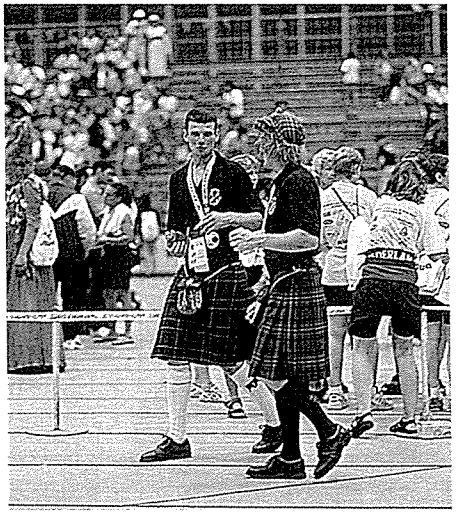
日本国旗、ドイツ国旗の掲揚に続き、林AOC会長とフローリックＩＷＧＡ会長が挨拶。挨拶後、フローリック会長から寺田秋田県知事に、記念品としてＩＷＧＡ旗が贈られた。

続いて、前回のラハティ大会から引き継いできた旗が、寺田秋田県知事からフローリック会長へ、フローリック会長から次回大会の開催地であるドイツ・デュイスブルク市長へと引き継がれた。ツィーリング市長は、次期大会のＰＲビデオをバックに、秋田へのねぎらいの言葉と次回大会の抱負を語った。

(4) パーティープログラム・閉式

寺田秋田県知事の閉会宣言後、大会旗が降納されると、午後７時30分からパーティープログラムがスタートした。競技のダイジェスト映像には各選手の注目が一斉に集まり、また、会場内では観客席から降りたボランティアたちが選手にサインを求め、一緒に写真を撮るなど、それぞれが思い思いに選手との交流を深めていた。ビデオ上映に引き続き、大道芸パフォーマンス、加曽利さんのライブ、総勢111人の子供たちによるスタジオＳのナミー＆ハギーダンスと続き、会場の盛り上がりは最高潮に達した。

雨天のための会場変更により、観客や選手誘導への混乱等、運営面での反省点は残したが、閉会式は独特の解放感の中、感動のうちに終了した。



表彰式

本大会では153回の表彰式が実施された。25競技が競技会場で表彰式を実施し、6競技がワールドゲームズプラザで表彰式を実施した。(オリエンテーリング競技は、1日目の表彰式を競技会場で、2日目の表彰式をワールドゲームズプラザで行った。)

また、優勝選手の国・地域の歌演奏及び入賞選手の国・地域の旗掲揚を実施するため、2000年に行ったプレ大会(パワーリフティング世界選手権)での表彰式実務の実施及び他大会の視察等を行いながら計画を立案した。

1. 実施組織

表彰は、大会本部の表彰式班と各表彰会場の表彰組織が協力して実施した。

(1) 大会本部表彰式スタッフ

大会本部の表彰式班は30人で構成され本部で業務を行う班長及び班員9人と、各会場に行き表彰の進行にあたる「表彰チーム」(7チーム、計21人)を配置した。

表彰チームは、大会本部からメダル・物品等表彰式に必要な物品を表彰会場へ運搬するとともに、表彰会場において会場スタッフと協力しながら表彰業務を実施した。

(2) 各会場での表彰式スタッフ

各競技会場及びワールドゲームズプラザでは、表彰式の進行全般について総括する「式典部長(班長)」の他、表彰台等の設営業務、選手・プレゼンターの招集・先導業務などを行うスタッフが選任され、表彰チームとともに式典の実施にあたった。

プレゼンターへ、メダル、入賞賞品及び花束を届ける表彰アシスタントは、各会場スタッフの他、県内2短大の学生が業務にあたった。

表彰アシスタントは浴衣・振り袖等を着用したが、その着付けについては、県内の着付け教室及び着付けの技術を持つボランティアに業務を依頼した。

国・地域の旗掲揚業務については、秋田県ボーイスカウト連盟に業務を依頼した。秋田県ボーイスカウト連盟が対応できない会場では、会場スタッフが掲揚業務を行った。

2. 式典内容

各表彰式は、次の次第を基本として実施したが、一部競技では、その競技の特性や競技独自の表彰式スタイルを加味し、細かい部分を変更した次第で実施した。

表彰式次第(基本形)

1) ファンファーレ
2) 開式通告
3) 入賞選手(チーム)、プレゼンター入場
4) 入賞選手、プレゼンター紹介
5) メダル、入賞賞品、花束授与
6) 優勝選手の国・地域の歌演奏及び入賞選手の国・地域の旗掲揚
7) 入賞選手(チーム)、プレゼンター退場
8) 閉式通告

(1) ファンファーレ

表彰式で使用したファンファーレは開会式の式典音楽を担当した石井氏に作曲を依頼した。演奏は陸上自衛隊第9音楽隊及び東北方面音楽隊が行い、事前録音を行った。

(2) 表彰アシスタント

各表彰のアシスタントは、浴衣、振り袖、祭り衣装等を着用し表彰式に花を添えた。

(3) 国・地域の歌演奏及び国・地域の旗掲揚

各表彰式で優勝選手の国・地域の歌演奏及び入賞選手の国・地域の旗掲揚を行った。機材の不調で国歌が流れないというアクシデントが空手競技で1回あった以外は、おおむね順調に実施された。しかし、女子綱引き競技で、バスク地方(スペイン)の選手が、スペインの国旗国歌を拒否し、表彰台から降りるという事件が発生した。

3. 物品等の準備

(1) 表彰台

表彰台は、大きさの異なる3種類(合計48個)を製作したほか、団体競技のため多数の表彰台が必要な一部会場については、業者に委託し表彰台を設置した。

(2) 国・地域の旗及び掲揚施設

表彰式で使用する旗は、参加77カ国10地域の合計で、349枚準備した。掲揚施設は既存施設を利用したが、既存の設備がない会場では、仮設掲揚設備を設置した。

(3) 国・地域の歌音源

表彰式で使用する国・地域の歌は、市販されている各種音源を入手し、必要に応じて検証を行い、1曲毎にCD－Rに録音して使用した。

表彰メダル

公式競技表彰メダル及び公開競技表彰メダルは、可能な限り秋田県内の伝統工芸を用いることとして製作先を選定した。

その結果、公式競技表彰メダル及びケースは、秋田県漆器工業協同組合、公開競技表彰メダルは角館工芸協同組合、公開競技表彰メダル用ケースは大館曲ワッパ協同組合が製作を担当した。

1. 公式競技表彰メダル

(1) デザイン

公式競技表彰メダルは、秋田県稲川町在住の漆芸家沓澤則雄さんのデザインを採用した。

表面のデザインは、日本の色として海外でも知られている「漆」の色を前面に配した。全体の形は、秋田県の形をモチーフとして円形化しており、金と銀の蒔絵で図案化された竿灯は、秋田の象徴でもある稲穂が実った収穫の状態を表し、選手の努力が実を結んだ瞬間の、まさに収穫の喜びと同じ歓喜を表現した。また、欧米の人々が普段目にしないであろう極東アジアの地図をデザインし、その中の日本、日本の中の秋田で、アジア初のワールドゲームズが行われることを世界に発信するデザインとなった。

裏面には、秋田の自然を象徴する「世界遺産白神山地」の風景を描き、メダルの表裏があいまって、我が秋田県は、文化と自然が共存したすばらしい地域であることを世界に示すことができるデザインとなった。

(2) 規格・授与個数

公式競技表彰メダルの大きさは、直径8.5センチ、厚さ約8ミリ、重さ約320グラムであり、金銀銅それぞれ267個が授与された。

2. 公開競技表彰メダル

(1) デザイン

公開競技表彰メダルの表面は、東京都在住、東京芸術大学教授の宮田亮平さんのデザインを採用した。日本の象徴である桜をシンボルマークの外側に配置し、メダルの下部には伝統工芸の「樺細工」をあしらい、その深い輝きで日本海を表現した。

中央に輝くシンボルマークは、「世界の国から、輝く太陽がやってくる」のキャッチフレーズのとおり、春には桜が咲き誇り、夏には青い海が輝く秋田の地で、世界のトップ選手が競うワールドゲームズが行われることを表示するとともに、ワールドゲームズそして秋田の光り輝く将来を祈念するデザインである。

裏面は、公式競技と同じデザインが用いられた。

(2) 規格・授与個数

公開競技表彰メダルの大きさは、直径8センチ、厚さ約9ミリ、重さ約280グラムであり、金銀銅それぞれ80個が授与された。

入賞賞品

入賞の喜びをいつまでも思い出せるよう、3位までの選手に入賞賞品を贈呈することとし、組織委員会で品物の選定を行った結果、「銀線細工入りペーパーウェイト」を採用した。内部に封入された銀線細工が秋田の伝統工芸であり、そのデザインも、秋田を代表する植物である「秋田蕗」を用いた。

参加記念品

選手役員のみならず、スタッフ、式典・イベントの出演者、その他大会の開催に協力いただいたすべての人々に参加記念品を贈呈した。記念品はオリジナルデザインのピンバッジとし、そのデザインは、マスコットキャラクター「ナミー・ハギー」のデザイナーである石川貴教さんに依頼した。